

## “環境リスク学—不安の海の羅針盤—”

(中西準子 著 日本評論社発行)

兵庫県立大学

矢澤 哲夫

**Tetsuo Yazawa**

*University of Hyogo*

著者は、東京大学教授、横浜国立大学教授を経て現在、独立行政法人産業技術総合研究所物質リスク管理センター長の職にある、水問題の専門家である。“水の環境戦略(岩波新書)”等多くの啓蒙書を上梓しておりこの本もそうした中の一冊である。著者は環境リスク学における日本の草分け的な存在であり、本書は著者の当該分野に関する自伝的な著書でもある。

環境リスク学とは何か。本書における著者の言葉を次に引用する。“農業は多かれ少なかれ生態リスクをもっていると考えていいでしょう。しかし、もし農薬を使わなければ、より広い農地が必要になり、それを森林伐採等で得ることになれば、それもまた生態リスクになります。とすれば、その両者のリスクを比較しなければ、農薬がいいか悪いか、決まられません。この場合も人の健康リスクの場合と同じように、異種の生態リスクの比較を可能にすることが、環境政策を決めるために決定的に重要になるのです。”(本書、pp 47)。

即ち、環境リスク学とは、異種のリスクを費用対効果も勘案して定量的に論ずる学問である。このためには、関連するデータの徹底的な収集およびその解析(特に数値解析)が重要であると著者は論じている。確かに人類は、現

在、種々の環境リスクに曝されており、あるリスクをゼロにすれば良いという単純なものではない。あるリスクをゼロにすれば別のリスクが大きくなるからである。こうした場合、これらリスクの総合的な極小値を見出す他ないであろうし、そのリスク評価のためには多種類の精確なデータの収集による定量的な議論しかあり得ないであろう。ただ、この議論の延長線上には人の生命の価値はいくらか、というような倫理的に非常にデリケートな問題が含まれているのだが。しかし、我々はこうしたことに対しても議論を避けるのではなく真摯に向き合わなければならない時代に生きているのであろう。当該分野に関する著者による、もう少し学問的で簡潔な要約は“岩波講座 地球環境学1 現代科学技術と地球環境学”(1998, 岩波書店)の第4章にある。

最後に本書の構成を以下に記す。

### 1部 環境リスク学の航跡

1章 最終講義(ファクトにこだわり続けた輩がたどり着いたリスク論)

(2004年の横浜国立大学における著者の最終講義録)

2章 リスク評価を考える(Q&Aをとおして)

2部 多様な環境リスク

3章 環境ホルモン問題を斬る

4章 BSE(狂牛病)と全頭検査

5章 意外な環境リスク

〒671-2201 姫路市岩手 2167

TEL 0792-67-4896

FAX 同上

E-mail: yazawa@ong.u-hyogo.ac.jp